

12月29日

## 主教トマス・ベケット

Thomas Becket

(1117/18～1170.12.29)

～カンタベリー大司教で殉教～



「トマス・ベケットの  
暗殺場面」

(装飾写本より)

ベケットはロンドンでノルマン人の商家の息子として生まれる。彼の父は熱心なカトリック信者で、毎年、成長するベケットの体重を量っては、同じ重さのパンを貧しい人たちに配ったという。

さて、ベケットは当時カンタベリー大司教であったテオバルドゥスに見出され、カンタベリーの助祭長になる。そして若きヘンリー二世の大法官と顧問になった彼は、国政に腕を振った。彼の異常なほどの出世をねたむ声が起こる中、ベケットは栄華を好み、王と信仰を深めていった。

そして大司教テオバルドゥス死後、ヘンリー二世はベケットを大司教に選ぼうとする。その裏には自分と仲の良い人物を大司教にすることによって、英国教会を王権下に置こうという意図があった。つまり王は教会の権力をも自分のものとしようとするのであった。しかしベケットはそのことに気づくと共に、自分は神に仕える身である以上、王と対立することを予見する。そのために彼は大司教になることを固辞するのだが、最終的には断りきれなくなって受けてしまう。ベケットは大司教になってからは禁欲と敬虔の生活に入り、予想どおり圧力をかけてきた王権から教会を守ろうとする。

だが王は、さらにベケットに対して、英国教会の実際上の権威を持つのは王だとするクラレンドン

16箇条への署名を強要する。さすがに身の危険を感じたベケットは、フランスのノルマンジーに逃れる。

ヘンリー二世はその後も迫害の手を緩めず、ベケットの親戚の財産を没収し、カンタベリーの共区民にも圧力をかけた。それを見かねて教皇が王を説得、ようやく王は譲歩し和解に至る。

その知らせを聞いてカンタベリーに戻って来たベケットだが、その後も争いは過熱する。そしてついある晩、王が遣わした四人の騎士によってカンタベリー大聖堂の祭壇で殺されてしまう。

ベケットの遺骸はその祭壇の下に葬られ、今でもその墓は巡礼地になっている。イギリス中世紀の詩人チョーサの代表作「カンタベリー物語」の主人公はこのベケットである。 (Y)

### <特禱>

信ずる者の光、魂の牧者である全能の神よ、あなたは、その言葉によってあなたの羊を養い、その模範によって彼らを導くために、しもべ、主教トマス・ベケットを公会の主教に召されました。どうかわたしたちに恵みを与え、信仰を守り、その生涯に従うことができまようように、主イエス・キリストによってお願いいたします。

アーメン